

つる植物～冬の森の楽しみ

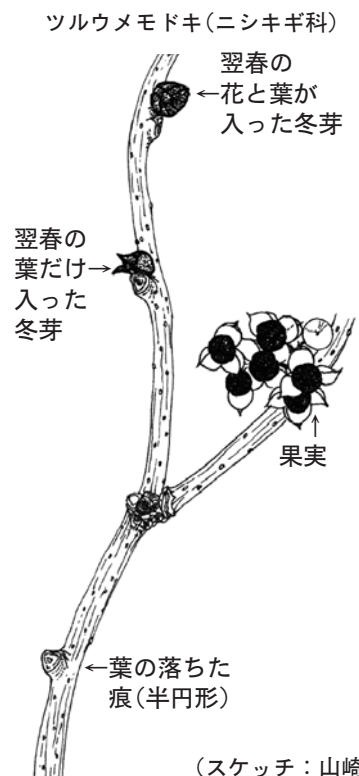
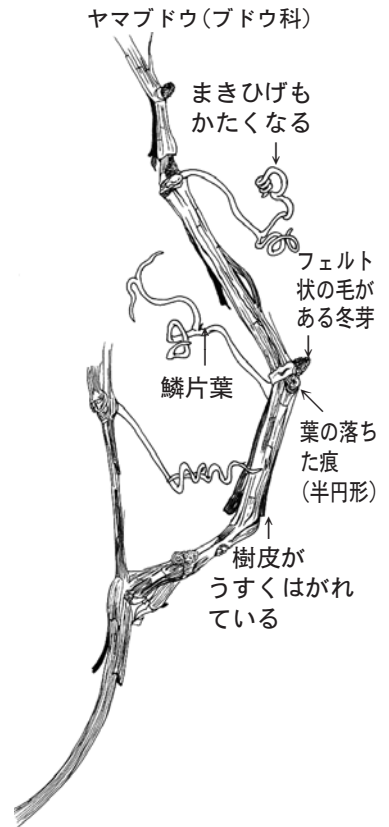
クリスマスが近づくとよく見かける壁かざり「リース」は、まっぼっくりやドライフラワーなどいろいろな小物がドーナツ型の土台にかざりつけられてできています。この土台を自然の材料で作るとき、つる植物を使います。ヤマブドウとツルウメモドキは北海道の身近なつる植物の代表格で、森林や道路わきの林でも見つかります。

ヤマブドウ（右図）は名前の通りブドウの仲間で、この実をつかったジュースやワインもあるくらいです。見つけ方は簡単で、10月頃、真っ赤に色づいた10cm以上の大きな葉が黄色や緑の木の上にあるのが目印です。巻きひげをもって、5m以上はある木にもおおいにかぶさるようにしてからみついています。この巻きひげは茎が変化したもので、その証拠に若い巻きひげの枝分かれの根元を観察すると、ウロコのようになった2～3mmの葉（鱗片葉）がついています（図）。もう1つの特徴は、幹の皮が、赤茶色っぽく、縦にさけてポロポロとうすくはがれてくることです。夏の終わりにはもう黒紫色の実がついていますが、寒さにさらされて初めて甘さが増すため、食べごろは10月下旬～11月上旬です。もっとも、人間が見つける前に動物に食べられてなくなっていることが多いのですが…。

ツルウメモドキは巻きひげがありませんが、幹が他の木の枝にからみつくようにしてよじ登っていきます。特徴はなんと言っても黄色い皮（仮種皮）が3つにわれて、その中から赤い実が出てくる鮮やかな色の果実です（左図）。果実は雪が降ってもついたままなので、白1色の森のなかで目立ちます。果実をつけたまま取ってきて、そのまま輪にすれば素朴なリースの出来上がりです。

冬の森は葉が落ちて見通しがよくなっているので、つる植物が見つけやすくなります。最近ではあらかじめドーナツ型にしたつるを売っていますが、土台をつくることから自分で作ってみてはいかがでしょうか。（山崎）

★つるの乾き具合によって、1晩～3日水（ぬるま湯）につけておくと形が作りやすいです。★私有地や保護区内では採集しないように気をつけてください。★つるは枯れているように見えても、来春の芽が生きていますから、取り過ぎないようにしましょう。



(スケッチ：山崎)

～大平原の小さな博物館～

カナダ・アルバータ “ハイウェイ3号線” から

北川 芳 男 (理学博士、元北海道開拓記念館学芸部長)

③ クートナイ・ブラウン開拓者村

ウォータートン国立公園を後にして、ハイウェイ6号線を北上すると、ハイウェイ3号線の手前にピンチャー・クリークという町がある (図)。この町で車を止めたのは、地図に「Kootenai Brown Pioneer Village (クートナイ・ブラウン開拓者村)」と書かれていたからである。

6号線が街のメインストリートと交差すると、すぐがっかりしたログハウスが目についた。重厚なドアを開けて中に入ると、思ったより広い。案内コーナースタッフの説明によると、ピンチャー・クリークとその周辺は19世紀中頃までは辺境の地であったらしい。

この「開拓者村」は約27.9haの敷地があり、エントランスホールから園内に出ると、まず、カナダ・太平洋鉄道 (CPR) のカブズ (貨物列車最後部の乗務員室) があり、続いて開拓地の小さな学校、神父ラカムブの教会、北西部騎馬警察の駐留丸太小屋、開拓者住居や納屋、浴室、そして、農機具格納庫、鍛冶屋など19世紀末期から20世紀初期に造られた12棟の家屋が復元されている。もちろん、すべての家屋の内部は家具・調度品が昔のままに展示され、野外展示の馬車や農機具も合わせ、西部開拓時代の様子が生き生きとよみがえってくる。このほか博物館には、第1次および第2次世界大戦関連資料や先住民族資料、蓄音機、おもちゃ、食糧雑貨、キッチン・居間・応接間などの再現展示など多くの興味深い展示がされている。



開拓者村の看板おじさん。

この施設の名称となったクートナイ・ブラウン氏は、1839年アイルランド生まれで、インドの英国派遣軍を除隊したのち、カナダに来てゴールド・ラッシュ時代 (1860年代) をブリティッシュ・コロンビアのカリブー地域で働いた。その後、南クートネイ峠を越えてウォータートン (現在のアルバー

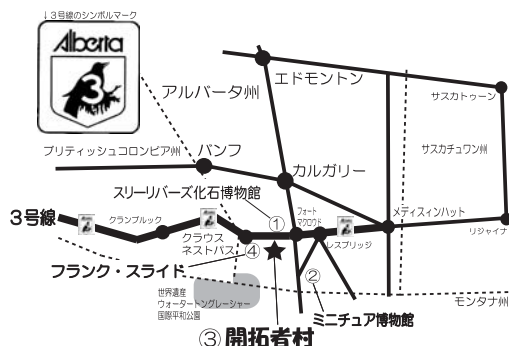


図 アルバータ州南部の道路地図 (①、②は23号、24号で紹介した博物館)



開拓者村の小さな小学校、当時の教科書が机の上に展示されている。

タ州) へ、さらに現在の米国ダコタへ旅し、そこで出会った先住民族メティス族のオリヴィアと結婚した。それからウォータートンに戻り、夫婦で地域の自然を守る活動を始めた。オリヴィアが亡くなってから、クートナイは子供たちをピンチャー・クリークのカソリック神父ラカムブの下に預けて仕事を発展させていったことから、ピンチャー・クリークとのつながりが生まれた。やがて彼は、クリー族 (オンタリオ州ハドソン湾沿岸域の先住民族) の女性イサベラと再婚したが、環境整備事業を継続し、ウォータートンが国立公園になったとき初代管理官に任命された。今は、彼の二人の妻とともにウォータートン湖畔に埋葬されている。

この「村」をつくる際には、ピンチャー・クリークはもちろん、地元企業と多くのボランティアが参加し、地域の歴史・文化を守り育てるために奮闘したという。文字どおり、地域の手作りの野外博物館である。